天使のおとずれ

天使のおとずれ

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=16659087

ダイの大冒険, ヒュンマ, ヒュンケル, マァム

またもや戦後ネイル村の子どもネタ。「天使のおくりもの」novel/16399242「天使におくるメッセージ」novel/16452811から続く話。
ようやく一区切りです。
激甘につき、要注意。
こちらも、フォロワー様の一言で誕生した作品です。
「妊婦のマァムをいたわるヒュンケルが見たい！」というご要望をさらら様user/2793486
からいただきましたので、それに合わせて、この1ページ目を書かせていただきました！楽しく書かせていただき、ありがとうございました～💕

2021.12.11ヒュンケルオンリーイベント「不死身の長兄」設置のweb拍手お礼画面から再掲載。

天使のおとずれ

　夜中に目をさますと、隣に寝ているはずの彼女の姿がなかった。
　何かあったのだろうか。体調が悪いのだろうか。
　不安に駆られた俺は、寝室を出て、階下へと降りていった。

　階段を下っていくと、リビングに人の気配を感じた。
　明かりはなく、格子窓から差し込む月の明かりだけが、仄かな光源となっていた。リビングの椅子に腰かけている人影がある。暗闇に慣れた俺の目には、それが誰なのか、すぐに分かった。
　俺が近づくと、足音に気付いたのか、彼女はこちらに目を向けた。
「ヒュンケル。」
　いつも通りの声が、俺を呼んだ。
　その声色に辛そうな響きはなく、俺は、少しだけ胸をなでおろすことができた。
「どうした。眠れないのか？」
　俺が気づかわしげに声をかけると、彼女は困ったように答えた。
「うん・・・。ちょっと痛みがあってね。」
　そう言って、彼女は、大きくなった自身の腹を撫でた。
　痛み、と聞き、俺は気が気ではなかった。
「大丈夫なのか？」
「うん。なんか、収まっちゃって。違ったみたい。」
「・・・そうか。」
「陣痛かと思ったんだけどね。」
　マァムはそう言って、俺と同じ感想を口にした。
　彼女は今、臨月だ。
　いつ、何があってもおかしくない状態だということは、俺にもわかっていた。だからこそ、夜中に姿が見えなくなった彼女に不安を覚えたのだ。
　マァムは、大きく膨れた自分の腹を撫で、息を吐いた。どことなく、しんどそうにも見えた。

俺が心配そうにしているのに気付いたのか、彼女が答えた。
「痛みは落ち着いたんだけど、なんだかどきどきしちゃって。眠れなくなっちゃったのよ・・・。それで、下に降りてきちゃった。」
「そうか。気が高ぶっているのかもしれないな。
　お茶でも淹れようか。」
「ありがとう。」
　マァムがほっとしたように笑みを浮かべた。
　俺はマァムに釘を刺した。
「少し時間がかかるから、長椅子に横になっていた方がいい。少しでも、体を休めておかないとな。」
「うん。」
　マァムを長椅子に移動させると、俺は、長椅子の上に畳んであった毛布を広げ、彼女の腹にかけてやった。
　俺は、ランプに明かりをともすと、竈の火を起こして湯を沸かした。そうして、レイラさんからマァムがもらってきていた、妊婦用のハーブティを淹れた。何種類かのハーブがブレンドされているようだが、俺にはよくわからなかった。
　本当は、彼女の身体のことを考えたら、早く寝かした方がいいのだろう。だが、どうにもマァムの気が高ぶっているようだった。少し落ち着かせた方がいいと思った俺は、淹れたばかりのハーブティを、彼女の前に運んだ。
　マァムは、俺が近づくと、長椅子の上に半身を起こした。俺は、湯気の立ち上るカップを、彼女に差し出した。
　俺からカップを受け取ったマァムは、両手でそれを包んだ。温かさと、立ち上る独特の香りを感じ、それだけで安心したようだった。彼女の表情が和らいだのが分かった。
　マァムは、しばらくカップを握りしめていたが、少しすると、少しずつ、その中身を喉に流し込んでいった。
　飲みながら、マァムは、俺に笑みを向けた。
「ありがとう。落ち着くわ。」
　俺もつられて、微笑んだ。
「それはよかった。」
　少しすると、マァムのカップが空になった。俺は、それを受け取

ると、テーブルに置いた。
　また、マァムが長椅子に横になった。腹が大きくなったので、マァムは、最近はあおむけに眠れないと言っていた。このときも、彼女は、体を横向きにし、長椅子の下に足を投げ出して、体を横たえていた。
　俺は、長椅子の前に椅子を出すと、そこに腰かけた。腕を伸ばし、横になったマァムの髪をそっと撫でた。マァムは、安心した表情で目を閉じていた。
　俺は、彼女に尋ねた。
「しんどくはないか？」
「うん・・・大丈夫。気持ちいい・・・。」
　俺の目の前に、彼女の大きな腹がある。姿は見えないが、そこに別の命があるのだと思うと、俺は不思議な思いがした。
「マァム。」
「なに？」
「触れてもいいか？」
「・・・うん。」
　何に、とは言わなかったが、彼女はすぐに分かったのだろう。マァムは、俺の手を取ると、自身の腹に導いた。
　俺の手が、マァムの大きな腹に置かれた。
　彼女の手のぬくもりと、腹部の温かさに俺の右手が挟まれた。
　しばらくそのままにしていると、俺は、手の下で何かが動く気配を感じた。マァムの腹の皮膚がゆがみ、ぐにゃりと、その下で何かが動いたのを感じた。
　俺は笑みを浮かべた。
「元気だな。」
「でしょう？おかげで眠れないのよ。」
　マァムは苦笑した。
　体の中で、他の生き物が動く、というのは、どんな感じがするのだろうか。俺には想像もできなかった。
　この手の下に、別の命がある。そして、別の意志がある。
　俺は、手に伝わる感触に想いを馳せ、ぽつりとつぶやいた。
「不思議だな。」

「なに？」
「いや・・・まだ生まれていないのに、もう意志を感じる。
　この子は、俺とも、お前とも違う。別の意志を持っているんだな。」
　俺がそう言うと、マァムもうなずいた。そして、困ったような笑顔を浮かべた。
「そうね・・・きっと、やんちゃよ。よく動くんだもの。」
「そうか。」
　だが、その言葉さえも微笑ましく、俺は笑みを浮かべた。
　俺は、マァムの腹に視線を戻した。手の下に、確かなぬくもりと、命の息吹を感じる。そして、確かな意志も。それが、不思議でたまらなかった。
　俺はつぶやいた。
「この子は・・・どこから来たのだろうな。」
　俺は、かつて魔界で学んだことを思い出していた。
「魔界にいたときに、俺はさまざまな学問を教わった。化学や生物学も学んだ。そのときに教えられた。無から有は生まれないと。」
　俺は、魔界で様々な学問を修めた。その中に、こんな法則があった。
様々な物質は、いろいろな条件の下で変化するが、その質量やエネルギー総量は変わらない。すなわち、無から有は生まれない、というものだった。
　では、この俺の手の下の命は、それが持つ意志は、どこから生じたのだろうか。
　俺は言葉をつづけた。
「この子は、確かに俺とお前の血を継いでいるのだろう。
　だが、その魂はどこから来たのだろうな。
　俺ともお前とも違う意志がすでにある。
　それは、無から有が生まれたように思えたんだ。」
　するとマァムがぽつりとつぶやいた。俺にも覚えのある言葉だった。
「意志があればそこには魂がある。」
「メルルの言葉だな。」

「うん。」
　マァムは、言葉をつづけた。
「魂はどこに還って、どこから来るのかしらね。
　うん・・・不思議ね・・・。
　私のお父さんも、あなたのお父さんも、その魂はどこにあるのかしら・・・。
でもきっと、どこかにあるような気がするのよね。この子を守ってくれるような気がするの。」
「そうだな。」
　俺もうなずいた。
　俺の父も、マァムの父も、今はこの世のものではない。
　だが、その魂はどこかに存在し、きっと、俺たちを守ってくれている。理屈も根拠も何もなかったが、俺もマァムもそう信じていた。
　マァムが、俺を見て微笑んだ。
「どんな子なのかしら。楽しみね。」
「ああ。」
　俺は、もう一度マァムの腹に視線を落とすと、その手の下に向かって呼びかけた。
「・・・俺も、マァムも、ちゃんとお前を待っている。
　ゆっくり、出ておいで。」
　俺は、マァムの中にある、もうひとつの魂に向かって呼びかけた。
　まだ見ぬ、我が子へと。

ヒュンケル

　ぼんやりと目を開けると、まだ、体は重く、けだるい疲れが残っていた。
　いまは何時だろうか。朝になったのか。
　あれから、どのくらいの時間が経ったのか。
　自分の置かれた状況を把握するのに時間がかかった。
　少しだけ、目を動かしてみた。
　私の隣に、ぬくもりがある。

私と同じベッドの上に寝かせられた、その小さな温かさを感じ、私は、胸がいっぱいになった。
　よかった。夢じゃなかったんだ。
　私が目をさましたのに気付くと、ベッドの脇に座っていたヒュンケルが、小さな声で私に呼びかけてきた。
「マァム。目が覚めたのか？」
「うん。」
「無理をするな。眠れる時に眠っていた方がいい。
　・・・まだ、この子も眠っている。」
「うん・・・。」
　ヒュンケルが、私の隣に視線を注いだ。とてもやさしい眼差しだった。
　この目を、私は知っている。
　いつも、私を見つめるときの眼差しだ。戦場で出会った頃には見せることのなかった、穏やかで、優しさにあふれた目。それがいま、私の隣に眠る小さな命にも注がれていた。
　その眼差しで、彼がこの子を見つめてくれていることが、私にはたまらなく嬉しかった。
　私も、隣に眠るこの子を視界に映した。
　私は不思議な感覚で満たされていた。
　常に私の中にあって、とてもよく知っているはずなのに、その顔を見たのはこの日が初めてだった。
　小さな体。
　小さな手足。
　しわくちゃの小さな顔。
　いまは、目は開いておらず、線になっていた。でも、つい数時間前、その大きな瞳、青みがかった白い目がまっすぐに私を見つめていたことを、私は覚えていた。
　その閉じた目元のしわさえも、可愛らしく、愛おしい。
　この世に迎え入れられたばかりの小さな命が、健やかな寝息を立てて眠っていた。
　私は、ヒュンケルに尋ねた。
「母さんは？」

「いったん自宅に戻った。
　また朝になったら来てくれるそうだ。」
　ようやく、私は今が夜なのだと気付いた。
「まだ夜中なのね。」
「ああ。夜明け前だ。」
　私は、彼のことが心配になった。
「ヒュンケルこそ、眠ってないでしょう？眠らなくて大丈夫なの？ずっと起きているんじゃない？」
「レイラさんが来たら、眠らせてもらう。それからで、大丈夫だ。」
　すぐにそう答えると、彼は、私を気遣ってくれた。
「お前の方こそ、疲れただろう？ゆっくり休んだ方がいい。」
　そう言って、彼は、そっと私の髪を撫でた。その手が優しかった。
　私は、涙があふれそうになった。
　そして、父親になったばかりの彼に呼びかけた。
「・・・ヒュンケル。」
「なんだ？」
「ありがとう。」
　私は、言いたかった言葉を口にした。
　すると、彼は少し驚いた顔になった。
　そして、ふっと笑みを浮かべると、また愛おしそうな眼差しで私を見つめた。
「・・・それは、俺の言葉だ。」
　私は、小さくかぶりを振った。
「ううん。
　私も、あなたにお礼が言いたくて。
　きっと・・・私ひとりじゃ産めなかった。」
　私は、数時間前の激闘を思い出していた。
「陣痛って、あんなに痛いのね。私、痛みには強いつもりだったけど、想像の何倍も痛かったわ。
　辛かった・・・いつ終わるのかしらって、もうどうしていいのかわからなくなって・・・。

泣きたくなって、我慢できなくて、叫んじゃったり。
　でも、ヒュンケルが、私の手を握ってくれていた。
　痛みがつらかったときに、その痛みを逃がすのも手伝ってくれた。
　私を励ましてくれて、支えてくれて・・・。
　だからきっと、私、耐えられたんだと思う。
　あなたがいなかったら、ここにいてくれなかったら、私、産めなかった。
　だから、ありがとうって・・・言いたかったの。」
　私は、少しずつ、思いを言葉にしていった。
　本当に辛かった。母の仕事の手伝いで、出産は何度も見てきた。それに、武闘家として、強い痛みを受ける戦いを何度も経験してきた。
　しかし、体の中から突き上げてくるあの痛みは、独特だった。体が内部から引きちぎられるような、押し広げられるような、他には例えようもない痛みだった。何時間も続き、息をするのもつらいあの陣痛の苦しみは、今まで戦いの中で味わってきたものとは全く異なっていた。
　母親と呼ばれる人たちは、みんなあの痛みを潜り抜けてきたのかと思うと、頭が下がる思いがした。
　ヒュンケルは、私の言葉をじっと聞いてくれていた。
　そして、その言葉を受け止めてくれたのだろうか。少しすると、私をねぎらうように、また私の髪をなでてくれた。
「俺は何もしていない。
　長い痛みに耐えたのも、みんな、お前の力だ。お前が頑張ってくれたんだ。
　だから、この子が無事に生まれた。
　頑張ったな。
　ありがとう、マァム。」
　ねぎらいの言葉は、私の中に染みるように入ってきた。人生を共にするのがこの人でよかったと、私は心から思った。
　私は、笑みを浮かべて彼に呼びかけた。
「これからは、三人ね。」

「そうだな。」
「育てる方がずっと大変だって、村のお母さんたちはみんな言っているわ。」
「・・・そうみたいだな。俺も言われた。」
「でも・・・楽しみね。」
「ああ。」
　小さな声で、私は彼と会話をつづけた。この穏やかな眠りを妨げないように、と。
　そして、この先も、この子が健やかでありますように。
　私たち３人が、温かい気持ちで過ごせますように。
　私は祈った。

マァム